

## 臨床倫理学応用コース実施報告（佐藤恵子）

京都大学大学院文学研究科応用哲学・倫理学教育研究センター（CAPE）及び京大オリジナル（株）主催による、臨床倫理学に関する教育プログラム（臨床倫理学応用コース）を2022年3月1日と3月21日にオンライン形式にて開催しました。参加者は、全国から37名の受講生と、ファシリテーターと講師12名、京大オリジナルから2名の総勢51名で実施しました。

応用コースの実施は3回目で、入門コースの受講者など、臨床倫理の問題への対応にある程度知識や経験のある人を対象にしました。新型コロナ感染防止の観点と、昨年の入門コースでオンデマンドによる動画視聴とライブ授業を組合わせたオンライン形式での実施が予想以上にうまく行ったこともあり、応用コースもオンライン形式にて実施しました。

私たちの臨床倫理学セミナーの目標は、医療者が臨床で難しい事例に遭遇した際に、問題を特定してその要因を探り、患者の利益を最大にするのに適切な方策を考え、戦術・技術も立てて実践するのに必要な技能を身につけることです。応用コースである今回は、患者・家族、医療者などの関係者すべてを見渡してそれぞれの考えやその源泉となっている欲、感情、利益などを把握した上で対応しないと解決しないような、難易度の高い事例を検討していただきました。具体的には2つの事例（重症の疾患をもって生まれた赤ちゃんに生命維持治療を続けるかどうかで家族や医療者の意見が対立して膠着した事例と、糖尿病性腎症で維持透析を受けていた人がシャントがだめになったら透析をやめたいと言って医療者が困惑する事例）を取り上げて、相談を受けた臨床倫理コンサルテーションチームとして、相談者にどのような助言を返すかというところまで検討していただきました。

2つとも、話を聞いたとたんに「うわあ、聞かなかったことにしたい」と言いたくなるようなハードな事例ですが、受講生のみなさんは、腰を据えて考え、熱心に議論されていて、心強く感じました。考えるためのツールとして四分割表や四原則などを用いることにしているのですが、今回は新しい試みとして、患者の空間を客観的に眺めて把握したら、「患者はどうあることがよいと思うか」という徳倫理の考え方と、関係者各人の苦しみを把握してそれを緩和する方法を考えるという「慈・悲の視点」を意識してもらうようにしました。

新しい試みを取り入れた理由は、倫理原則を基にどのような行為が適切かを考えることは必要ですが、これまで複数回の事例検討を実施してきた経験から、医療の目標である「人の苦しみを和らげること」を心に持ち、医療者や倫理コンサルタントはそれを常に意識していないと、肝心なところが置き去りになってしまい、適切な方策を導くことができないのではないかと考えたからです。今回の事例では、患者・家族、医療者それぞれが抱える苦しみに焦点をあてて方策を立て、戦術を練ることがポイントでしたが、受講生のみなさんは基本的な知識や経験を持ち合わせており、手際よく意見交換を進め、登場人物それぞれが抱える苦悩を想像し方策を導いておられました。各グループでの検討結果を聞きながら、そこはかたないぬくもりや温かい雰囲気も伝わってきて、徳倫理の考え方や慈・悲の視点を意識してもらうことは、そこそ役に

立ちそうな手応えを感じ、ちょっといい気にもなりました。

もちろん、受講生のみなさんが問題の考え方に慣れていることや、議論をまとめる際に Google docs なる文明の利器を活用したこと、ファシリテーターのみなさんが議論を円滑に進めてくださったことも大きいです。そして、新生児医療や透析医療、これらの法的問題について事前にオンデマンド授業で解説いただけたことも、理解や議論の大きな助けになっているのは言うまでもありません。オンデマンド授業を快く引き受けてくださった道和さん、長尾さん、服部さんに感謝いたします。

また、今回は、コースの最後に1時間ほど座談会の時間を設け、講師・ファシリテーターから、施設ごとの取り組みや問題点などをお聞きしました。今後の課題を考えるヒントが得られ、とても有益な時間でした。そして、コース終了後は、Wonder というこれまた文明の利器を使って、立食パーティーのような雰囲気の中で意見交換の場を持ち、あーだこーだ、現場のお話をするのができて楽しい時間を過ごしました。

参加してくださったみなさま、ファシリテーターと講師のみなさま、そして、準備から運営まで細やかな気遣いをしてくださった京大オリジナルのみなさまに深く感謝します。

私自身は、今回の事例を通じて、「問題の何をどのように考えたらよいのか」について、また、「人に幸せに生きていてもらうには、何が必要か」など、改めて考える機会になりました。折しも、新型コロナの流行や砲火の下を逃げ惑う人達がいる状況のなか、人間の存在のあまりの軽さに憤りを覚えるのと同時に、それが虚しさにならないように先人達が努力して築き、維持してきたものの大事さやありがたさを噛みしめていたということもあります。スタッフの方々とセミナーの準備を進める中で、また、受講してくださるみなさんとやりとりする間に、楽しさや気づきも含めて多くのものを頂戴し、本応用コースの企画運営を通じて、自分が進化向上している感じがします。受講生のみなさんからはそれなりの参加費（カツ丼 20 杯分くらい！）とお時間を頂戴しておりますので、みなさんにも、何かしら得るものがあり、患者さんや医療者に何らかの善いものがもたらされたらたいへんうれしいです。セミナーでは考え方の道筋の「型」を示しておりますので、問題に遭遇した際はそれを使って実践してみてください。主体的に活動することで、ご自身の血肉になると思います。そして、企画運営側としては、「どのような関わりや働きかけをすれば受講生によりよい経験になるか」を考えて、工夫を重ねたいと考えております。

講義では、倫理コンサルタントは、現場にいる人が考えられるように支援するのが役割だと申しあげましたが、せっかくいただいたご縁でもありますし、みなさんの倫理コンサルテーションの活動がうまくいくように、私たちスタッフにできることがあれば引き続きお手伝いできればと思っています。本臨床倫理学セミナーを通じてつながりを得た受講生が立ち上げた「りんこん研究会」の目的は、正にここにあります。ご関心をお持ちの方は、どうぞお気軽にお声がけいただければ幸いです。

2022年3月23日

佐藤 恵子